

＊製作にご協力をいただく中で、技術について沢山の事を教えていただきました。ここでは動画ではお伝えしきれなかったお話の一部をご紹介します＊

馬場憲生さん（有限会社馬場染工場 代表取締役社長）



手捺染の風呂敷やスカーフ等の小巾から広巾の生地まで数多く手がける馬場染工場。大正2年に創業され、馬場憲生さんは4代目です。創業当初は型友禅の着物を手がけていましたが、先代が手捺染の設備を拡張されたそうです。海外ブランドからの依頼も多いそうですが、日本の伝統的な染織品ならではの技術特徴と染色の難しさを教えてくださいました。

「風呂敷は'耳'を染めなあかんで」と馬場さん。

'耳'というのは、生地幅の両端の数ミリの部分を指します。糸がほつれないように処置されたものですが、耳以外の生地との間に僅かな段差が生まれるため、手捺染でムラなく染めるのは非常に難しいそうです。

特に風呂敷や暖簾の場合、縫製する際に生地の上下は縫いますが、左右の耳はそのまま活かすため、耳の部分が綺麗に染まっていなければ商品になりません。スカーフや洋服などの場合は、四方を縫製したり、生地の必要な部分だけ切り抜いたりするため、耳の部分は見えなくなります。

着物の場合は、仕立てをすると生地の上は見えなくなりますが、反物の状態で販売されることもあるため、耳まで綺麗に染める必要があります。また、縫い合わせた時に隣り合う生地の色が同じであるためには、13メートル以上の生地を均一に染めなければなりません。

生地を端から端まで無駄なく使用する日本文化は、染織を担う職人の高い技術力によって成り立っていると言えるでしょう。



今回の染色を担当されたのは、児島怜さん。学校の授業で馬場染工場に見学に訪れた際に、手捺染の技術に魅せられて職人になることを決められたとのことでした。

撮影中、カメラワークを気遣ってゆっくり作業をしてくださいました。